

遺書2015

瀬川 智美子

お世話になった皆様へ

皆様に出会えて幸せな人生でした。心残りは父と母よりも先に死んでしまうかもしれないということ。それを考えると悲しくて申し訳なくてたまりません。そうなってしまったらごめんなさい。皆様、どうか二人のことをよろしくお願い致します。

二〇一二年十月八日付けでしたためたこの遺書は、今でも私のカバンに入っている。

その二週間前九月二十四日午前十時、私は手術台の上にいた。事前に医師から受けていた「それが良性ならば腹腔鏡手術で十に時終了。悪性ならば開腹に切り替え尿管空腸吻合術。この場合の終了時間は午後四時から五時を予定しています」という説明を、まるでヒトゴトのように聞いていた自分を思い出す。手術前日の日記には「腹さえくくれば怖くない」と書いた。手術台の上の私は、腹をくくられてなごいなかった。

名前を呼びかけられ目を覚まし今何時ですかと問いかける。「夕方の四時半ですよ」応答する看護師さんの声は優しい。しかし、私にとってそれはガン宣告だった。

胆嚢と胆管の全摘出。それに付随するいくつかのリンパ節と肝臓の一部も私の体から切り取られた。胆嚢ガンステージ3。四十代でこの病気は珍しい、と言われた。

今までどちらかというところ「ツイテル」方だと思ってきた。はずれくじを引くことは極めて少ない。当選おひとり様というマレーシア旅行をいただいたこともある。十年以上風邪ひとつひいたこともなかった。健康診断は毎年受けている。それなのに、なぜ。

体の異変はその年の七月に始まった。痛みの範囲は腹部から背中まで広がり、体中が痒かった。近所の病院へ行くと「すぐ大きい病院へ」予約制なのに待たされると評判の総合病院へ紹介状が出された。そこではカルテに赤いマジックで「緊急」と

書かれ、待たされることなく次々と検査が行われた。その異様な雰囲気と「袋状で破れやすい胆嚢は細胞だけ採取して調べるのは難しい。手術するまで判断出来ないが。もし悪性ならこの年齢だと進行は早いからのんびりしてはいられません」という医師の言葉に心がざわついた。

そんなある日、耐え難い痛みに襲われ夜中の救急外来へ。そのまま緊急入院となる。病室で見た夢とあの頃の気持ちを重ねる。どうしても家に辿りつけない夢。帰りたいのに帰り方も帰り道も忘れ、迷い、変なエレベーターに乗り、焦り、帰りたいたい我が家へ辿りつけない夢。点滴の管を見つめ、ふと不安がよぎるたび「まさかこの私がガンになるはずはない」自分の幸運にしがみつく。だが、その期待は裏切られた。麻酔から目を覚ますと同時に自分に起きた現実を知った私は、眠れない夜がしばらく続いた。暗闇の中様々な感情がわきあがる。「こんなバチがあたるようなこと、なにかしたかな？」考えてみると思い当たる自分の傲慢さに驚き、あきれれる。「もしかするとあのときのあのひとことが、あの人を傷つけたのかもしれない。そのバチがあたったのかな」「あのときのお礼をちゃんと態度で示していないからそのバチがあたったのかな」病気とは関係ないのに、忘れていた出来事は次から次へと頭をかすめる。

病気について疑問がわくとその答えをインターネット上に求めた。ウソか誠か定かではないにしる情報は溢れかえっていた。手術適応状態で見つかる胆嚢ガン約二〇%。そこに自分が含まれていることへの安堵感に胸をなでおろすこともあれば、胆嚢ガンステージ3切除後五年生存率「四十一・九%」の数字に血の気が引いてしまったことも。心は不思議だと思った。いくつもの希望を持っていても、たったひとつの意にすぐわかない情報が入ると希望の光はたちまち消える。マイナスがもたらす気分の落ち込み具合の絶大さ。取りつかれたように情報を集めては一喜一憂する私を見兼ねた主人が「インターネットで病気のことを調べるのは、やめたほうがいいよ」と助言してくれなければ、私はいつまでも平常心を取り戻すことは出来ないでいただろう。インターネットから離れると次第に心が落ち着き、眠れない夜は終わった。手術前日にしたためた「腹さえくくれば怖くない」の境地に近づけたのかもしれない。

病室の中、天井を見上げながら命が間もなく終わるかもしれないと考えたとき、感謝の言葉を伝えきれていない人たちの顔が浮かんだ。悔しかった。あんな思いは二

度と御免。病気前の私は感謝の気持ちなんていつでも伝えられるものとタカをくくっていた。それは命が永遠のものならば叶うこと。しかし永遠の命を持っている人など、この世には誰ひとりとして存在しない。「ありがとうの言葉は懐にためずその都度心を込めて伝えよう」私は、私自身に誓った。

病気については、一部の人にしか話していない。隠しているのかと言われると、まあある意味そうなのかな。「私が元気であることは同じ病気になった人たちの希望になるかもしれない」そういう思いは常にある。だけどおおやけにはしていない。弱音や愚痴になりそうなのは口から出すものかと、自分に言い聞かせてきた。このいじけた気持ちが品良く育ち人生の深みになったと思えるまで自分自身と向き合いたかった。病気は勝つも負けるも戦うもない。自分という人間と徹底的に向き合うきっかけとなり得るひとつのツール。私にとっての病気とは、自分自身の傲慢さと向き合うということでもあった。その傲慢さをそぎ落とし本来の自分を取り戻していくにしたがい、心が強くなっていくのを感じた。

手術後受けた抗ガン剤治療理由説明書には「延命のため」と書かれていた。ガン治療には「完治のため」の項目はない。治療中、東京オリンピック開催決定のニュースを見た。「果たしてこのオリンピックをこの目で見ることはできるのだろうか」そう考え、とてつもない恐怖に襲われた。「手術成功＝完治」ではないのがガンという病の怖いところ。経過観察は今後も続く。だが、今の私は東京オリンピックの話題を聞いてもびくともしない。やはり私は、強くなれたのだ。

体調が落ち着くと地元放送局が主催するアナウンスセミナーへ通った。テレビで見慣れている実際のニューススタジオで本番さながらの収録を行い、その映像をDVDにまとめてくれると聞いて受講を決めた。病気の後にも関わらずこういう場所へ元気に通う姿が映像として残っていれば、たとえこの病気で私がこの世を去ったとしても、残された家族の救いとなるに違いないと考えた。以前は消極的だったSNSの投稿も積極的になった。これらはすべて「私の遺書」だ。「あいつ、楽しく暮らしていたのだな」そう思っほしいから、いつも笑っていることを心がけた。命あることのありがたさを思うとすべてが輝いて見え、この目に映る世界はみな素晴らしい。いつの間にか、心がけなくても自然と笑顔でいられるようになった。

ガンを経験した私が笑っていられる本当の理由は、死を自分の身にいつか必ず起こるものだと認識し、今こうして生かされていることへの感謝を存分に味わえている

から。私は人生まるごと愉快だと心の底から思っている。

「瀬川さんはどうしてそんなに元気なの？イヤなこととかないの？どうしたらそんなにいつも笑っていられるのか教えてください」先日、病氣のことを知らない友人から質問を受けた。その時、私の元気が空元気ではなくなったことを実感した。「シメシメ。ようやくこの日がやって来た」

隠すのはこの辺で止めにして。これからはこの経験を話していこうと思う。そして、いつかやろうと後回しにしていることがあるのなら、すぐ始める方がいいと声を大にして伝えていく。いつまでも続く命などないと意識さえすれば、今出来ることはたくさんある。私が元気であることが、誰かの勇気に繋がることを願い、必要としてくださる人にこの声を届けていきたい。それが私の使命。

お世話になった皆様へ

私は今、生きている限りいつか必ず訪れる死というものを意識しながら今日ある命に感謝して、楽しく笑って生きています。ガンはある意味幸せな病氣です。事故や災害で一瞬のうちに命を奪われてしまう人もいるというのに。私はこうして生かされている。ありがたいです。生きている限り死と背中合わせなのは誰しも当たり前なのだけど、しばらくは関係ない、まだまだ先のことだと気にもしてきませんでした。この病氣は、死はいつ訪れてもおかしくはないのだという当たり前すぎる現実を、当たり前前すぎて忘れてしまう現実を、自分も周りも巻き込んでしっかりと教えてくれました。死への心構えを持たせてくれました。今日、この命があることへの感謝に気づけるチャンスをいただきました。歳はとりたくないと人は言うけど、物忘れが激しくなろうとも、体力が衰えようとも、誰かに迷惑をかけてしまおうとも、それでも私は長生きしたい。だけどそれは希望であって、いつこの世からいなくなってしまうのかは、誰にもわからないことだから、心を落ち着け毎日を笑って過ごしています。たとえ私が皆様より先にこの世を去ることがあったとしても、私は私の命を精一杯に生ききって旅立つのだから、どうか必要以上に悲しまないでくださいね。

これは今年の元旦にしたためた私の新しい遺書。カバンにこの一通が追加された。これからも、その時々を思いを遺書にしたためて生きていく。いつか私の命が消えるとき、カバンにはどれだけの思いが詰まっているのだろう。